

平成28年度 グローバルリーダーシップ育成センター 活動報告

(1) 国際化教育プロジェクト

- ・グローバルリーダーシップ育成センターの概要
- ・シンガポール英語研修
- ・テクニカルチャレンジ
- ・短期留学生受け入れ

(2) リーダーシップ育成プロジェクト

- ・分野横断的能力の育成と実践

グローバルリーダーシップ育成センターの概要

1. グローバルリーダーシップ育成センター(以下、GLセンター)の目的

今日、実践的技術者教育においては、問題解決能力、コミュニケーション能力、チームワーク能力を身に着けた国際的に通用する技術者の育成が強く求められている。さらに、世界ではグローバル化がますます進んでおり、これからの実践的技術者には前述の能力に加え、国境を越えたチームワーク力や交渉力、マネジメント力も求められることになる。

このような社会情勢に対して、本センターでは熊本、八代両キャンパスにおいて次のプロジェクトを実践していく。

(1) 国際化教育プロジェクト

国際交流プログラムや海外インターンシップ等を通して、異文化理解力や英語によるコミュニケーション力を高めつつ、国際的視野を広げ、国際協調精神を育むことで、多様化する社会で活躍できる技術者の育成を目指す。

(2) リーダーシップ育成プロジェクト

リーダーシップ研修会やワークショップ、ボランティア活動研修等を実施し、リーダーシップやマネジメント力、チームワーク力の向上を図り、次世代リーダーの育成を目指す。また、特に分野横断的能力(ジェネリックスキル)については、全国の高専と連携したプロジェクトを通じて学生のリーダーシップ育成のための教育や評価の手法の開発を目指す。

2. GLセンターの設備

本センター事務室は熊本キャンパス内に設置されており、両キャンパスの連携を図り、また、国内外の他の教育機関との窓口として活動している。熊本キャンパスにおける各事業部担当者もここを拠点とし、連携を密にしながら活動している。グローバルリーダーシップ育成センターとして、講義やグループ討論・活動など活発に行えるように演習室、管理室等を整備してる。

八代キャンパスでは、旧 PBL・総合教育センターで整備された施設を活用しつつ、ICT活用学習支援センターとの連携も図りながらグローバル事業を進めている。また、学生のリーダーシップ育成の場として学生のラウンジや国際交流室、キャリア教育のためのキャリア開発室が整備され学生の様々な活動に開放されている。

3. GLセンター事業の概要

高等専門学校は、5ないし7年間という比較的長期間にわたる教育制度であり、また15歳から20(22)歳までという、将来の職業を中心とした社会人生活に向けた重要な人格形成期に関わる教育制度である。この特長を生かした、教育プログラム全体を貫くグローバルリーダーシップ育成のための教育環境の整備が必要だと考えられる。また、職業人としての

技術者を育成するためには、一般教養科目・専門工学科目の別なく、多くの科目における国際化教育に寄与する授業内容の改善や教育実践が必要である。このために、国際化教育に関して教職員をインスパイアすることも重要な課題であり、こうしたことを踏まえ、GLセンターでは旧 PBL・総合教育センターより引き続き、以下のような事業について検討し、計画・実施する。

- (1) グローバルリーダーシップ育成のためのモデルプログラム開発
 - (ア) 低学年から高学年（入学から卒業・修了）に至るまでの連続性を持った国際化教育支援科目の開発
 - (イ) 関連する重要な授業科目において学生が自主的に国際化を形成する教育手法の開発
 - (ウ) キャリア教育、創成教育、特に分野横断的能力の育成に関する教育など、複合的な教育目的・手法との有機的連携を踏まえた教育手法の検討・整備
- (2) 教職員のスキル向上に向けた研修プログラムへの参加促進及び開発
 - (ア) 上記教育実践を行うにあたり必要とされるスキル習得を目的とした研修内容の計画・実施
 - (イ) 国際化教育の実践の場として重要となる諸外国の教育機関・企業との国際交流の機会の増加

4. GLセンターの事業計画

上に示した目的を達成するために、今年度は以下の事業を実施する。

【平成 28 年度】

- (1) 国際化教育支援科目の開発
 - (ア) 両キャンパスでの国際化教育のブラッシュアップ
これまで両キャンパスで行ってきた国際化支援教育について、GLセンターの発足を機に、カリキュラム調査、それらの内容について整理、情報の共有化、問題点の洗い出しを行う。
 - (イ) 国際化教育の実施
熊本キャンパスにて実施されている国際異文化理解授業を、引き続き 9 高専連携事業として実施する。また、今後の国際化教育の在り方について検討を行う。
- (2) 教員研修プログラムの開発
 - (ア) 国際化教育に関する教員研修プログラムについての検討を行う。
- (3) 短期留学派遣学生と受け入れ学生の増加
国際化教育プログラムの教育実践、キャリア教育事業部と連携しての海外インターンシップを含んだ短期留学派遣プログラムの活性化を図る。

(4) 国際交流活動

これまで実施してきた夏季英語研修（英語キャンプ）、テクニカルチャレンジ、国際プログラミングコンテストなどについて引き続き実施する。

(5) 9 高専連携事業^[注]との連携活動

PBL・総合教育センター(国際化教育事業部)がこれまでに実施してきた国際交流プロジェクトを9高専連携事業と連携して継続する。

[注]「9高専連携事業」とは、文部科学省から採択された「平成24年度大学間連携共同教育推進事業」で、事業名「高専・企業・アジア連携による実践的・創造的技術者の養成」のことで、九州沖縄地区の9つの国立高等専門学校が連携し、今年度まで、インターンシップ、海外研修、専攻科の単位互換等を推進する取組を行っている。

(6) 分野横断的能力育成のための教育手法開発

「企業技術者と連携した分野横断的能力の育成と実践評価」について拠点校として全国のサブ拠点校と連携し、教育及び評価の手法の開発を行う。

GL センター活動報告

GL センターでは、平成28年度に次のような活動を行った。

	事業名	期間	参加者	実施場所
1	英語キャンプ2016	平成28年8月13日から 平成28年8月29日まで17日間	18名	シンガポールポリテクニク (シンガポール)
2	テクニカルチャレンジ2016	平成28年8月31日から 平成28年11月1日まで12日間	9名	香港VTC/IVE (Chai Wan)
3	ハノイ大学(HANU)における英語研修	平成28年9月5日から 平成28年9月15日まで11日間	8名	ハノイ大学(HANU)
4	「企業技術者と連携した分野横断的能力の育成と実践評価」全体会議	平成28年3月1日から 平成28年3月2日まで2日間 及び平成29年3月29日		熊本高専八代キャンパス TKP東京駅八重洲カンファレンスセンター

■ 概要

経済産業省や文部科学省は、日本経済の新たな成長に向けて「グローバル人材育成」の推進を強化していることは明らかである。これは日本が世界の激しい競争の中で生き残っていくために必要なことであり、工学系技術を学ぶ高専の学生諸君には技術力だけでなく、異文化理解と活用力、さらに英語によるコミュニケーション力が求められているからであろう。国内に留まって仕事をする者にとっても外国との折衝が必要不可欠である現状を認識し、これらの能力を高めていくことが重要である。

このような現状を踏まえ、熊本高等専門学校は、全国の国立高専に在籍する学生を対象とした、異文化に肌で触れながら英語力を向上させる語学研修を実施したので報告する。

■ 日程、開催場所および参加人数

日程：平成 28 年 8 月 13 日（土）～29 日（月）の 17 日間

開催場所：Singapore Polytechnic, School of Communication, Arts and Social Sciences

参加者数：18 名（苫小牧高専 1 名、旭川高専 1 名、一関高専 1 名、仙台高専 2 名、秋田高専 1 名、石川高専 1 名、沼津高専 2 名、鳥羽商船高専 1 名、舞鶴高専 1 名、奈良高専 1 名、香川高専 1 名、久留米高専 1 名、有明高専 1 名、佐世保高専 1 名、熊本高専 1 名、都城高専 1 名）

■ プログラム

日 程	曜日	プログラム内容
8 月 13-14 日	土-日	移動
8 月 14 日	日	オリエンテーション
8 月 15-19 日	月-金	語学研修
8 月 20-21 日	土-日	施設見学、課外活動など
8 月 22 日-26 日	月-木	語学研修
8 月 25 日	木	ボランティア活動、
8 月 26 日	金	最終発表、企業見学
8 月 28-29 日	日-月	帰国

■ 活動の様子

これまで学生が経験してきた、知識教授型のいわゆる「座学」ではなく、学生の積極的な参加と活動が主という授業スタイルで進んでいくため、学生が自ら学ぶ姿勢で取り組みことが重要である。授業のコンテンツも英語に慣れ親し



むことにも配慮されており、英語の歌を取り入れたり、日本文化を現地学生に紹介するための Culture Exchange Day を作り、シンガポールポリテク全学に公開するなど、イベントを通して英語を活用する機会がふんだんに設けられてあった。また、教室での授業だけでなく、異文化理解のプログラムや日系企業の見学、さらには市中に出てボランティア活動を通じて市民生活に触れるなど、様々な活等を取り組みを組み込むことで、参加学生の学習意欲を盛り上げ、実践的な経験を積むことができた。

■ 学生の感想

本プログラム終了後に、参加者全員に感想文およびアンケートを提出させたので、その一部を以下に記す。

- 今回の英語キャンプでたくさんのことを学びました。

以前、僕は自分自身の英語にあまり自信がなく、英語で外国の方と話すことなどすごく不安でした。しかし、現地の先生方や学生の方々、また一緒に参加した高専生の先輩方が親切に優しく接して下さったので、どんどん会話をすることができました。そのおかげで、自分でも成長を感じるほど、英会話力を向上させることができたと思います。

一番の成長は、自分の英語に自信が持てるようになったことだと思います。

地元の英会話スクールの先生に英会話に文法はないと教えていただいたので、その言葉を武器に、とにかく喋りました。相手に思うように伝わらないときは、より簡単な単語を見つけて、ジェスチャーもつけて説明しました。文法がぐちゃぐちゃで伝わらなかったことも多かったです。その他にも発音やシング

リッシュという壁も多かったです。しかしそんな中でも、冷静に簡単な単語を探しながら伝えると理解してもらえることが多かったです。



- 私にとって初めての東南アジアであるシンガポールでの英語キャンプは、非常に充実した時間となった。特に、スピーチ課題を通じて、自分の思いや考えを英語で表現する力を向上させることができた。しかし、これからも今のモチベーションを維持し、努力し続ける必要がある。また、シンガポールという国について様々な発見をすることができた。シンガポールはやはり、日本ともアメリカとも全く違う文化や考えを持っていた。これらの新鮮な体験は、私の世界を更に広げてくれた。これからも、シンガポールでの経験を糧に、英語力の更なる向上させることを目指して、努力を続けていきたい。



- 2週間の研修期間で、学ぶことには限りがあるし、実際、自分の英語力やコミュニケーションスキルがどの程度向上したのか、正確には分かりません。しかし、今回気づくことができた“自信を持つ”ということは、今後の人生に必要な不可欠な点だと強く感じています。技術者として今後働いていく上で、会議や取引の場面で、自らの専門知識に関して不安そうな態度を示されては、相手は不安で仕方なくなると思います。プレゼンテーションの場面においても、自信を持ってハキハキと発言していかなければ、相手に自分の気持ちは伝わらないはずで、決して自意識過剰にならず、ほどよく自信を持っている人は、周囲の人から頼られる存在にもなれます。私は、そんな大人になれるよう今後の生活を送っていきたいと思います。

■ まとめ

例年のことであるが、参加者に提出させた感想文からは、本プログラムに対する評価は非常に高く、満足度も高いことがうかがえる。また、多くの参加者が述べているが、英語の学習はもとより、他高専の学生との交流/共同生活に満足している様子も見取れる。加えて今年度は、同年代の学生だけでなく市民と触れ合う機会としてのボランティア活動も組み入れられたため、言語によらずコミュニケーション能力が例年にも比して向上したと感じる学生も多く見られる。本プログラムは成功裏に終えることができたと考えられる。このプログラムが来年以降に向けてさらにブラッシュアップされ、将来海外で活躍できる日本人技術者育成の一助になれば、と期待している。

テクニカルチャレンジ 2016

■ 概要

香港 VTC/IVE の学生と九州沖縄地区の高専の学生が互いに協力して技術課題に取り組む国際交流プログラムである。課題解決という同じ目的（ゴール）を目指し活動することで、コミュニケーション力を高めるとともに、グローバル化への対応力を培うことを目的とする。

■ 日程、開催場所および人数

日程：平成 28 年 9 月 1 日～9 月 10 日の 10 日間

開催場所：香港 VTC/IVE Chai Wan/Sha Tin 校および中国本土

参加者数：9 名（旭川高専：1 名，八戸高専：1 名，石川高専：1 名，長野高専：1 名，明石高専：1 名，佐世保高専：1 名，熊本高専：2 名，都城高専：1 名）

■ プログラム

日程	曜日	プログラム内容
9 月 1 日	木	出国，香港到着後，中国本土へ移動
9 月 2 日～4 日	金～日	中国本土にて工場見学および文化施設見学後，香港へ移動
9 月 5 日～7 日	月～水	技術課題にチャレンジ
9 月 8 日	木	技術課題・プレゼンにチャレンジ フェアウエルパーティ
9 月 9 日	金	現地学生との交流
9 月 10 日	土	帰国

■ 活動の様子

➤ 初日

羽田空港より香港へ。4 時間ほどのフライトを経て，香港に降り立ち，香港の学生，シンガポールの学生と合流，その後バスに乗って中国本土へ移動した。バスの旅を終えて，香港から 1 番近い中国「深圳」に入り，午後 6:00 中華料理のレストランで食事をとった。

➤ 2 日目

1 日中，工場見学を実施した。午前中はプラスチックや樹脂などを取り扱う工場で，とても暑かったことが印象に残っている。午後は中国製自動車を製

造する工場を見学した。

➤ 3日目

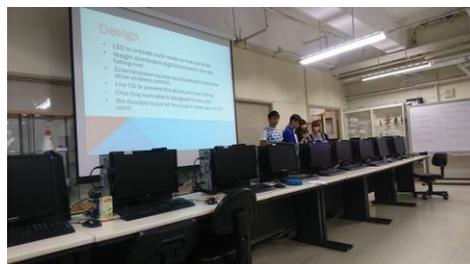
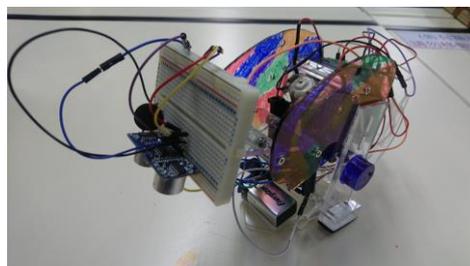
本日はボランティア活動をメインに実施した。耳に障害のある子供たちが暮らしている施設を訪問した。施設には二歳から十二歳の子供たちが暮らしており、ジェスチャーゲームや椅子取りゲームをして遊びながら交流活動を実施した。

➤ 4日目

canton タワー見学, および美術館にて中国文化について学ぶ機会を設けた。

➤ 5-8日目

技術活動「ウォーキングロボットの制作」に従事した。基本的に PBL 形式で行われ, 日本/香港/シンガポールの国際チームを基盤とした活動が行われた。製作するロボットはテーブルから落ちないように, 床面の状態をセンサーで検知しながら歩く二足歩行ロボットであり, さらにスマートフォンでも操作できるものである。そのため, ロボット本体のみならず, ロボットをスマートフォンで操作するためのアプリを作ることが課題である。初めてのことばかりでどのチームも苦戦していたが, 上手く操作できないときは何が原因なのかを見つけて改良していき, だんだんスムーズに操作できるようになっていった。最終日のプレゼンテーションでは, 各班のアイデアを英語で紹介しあっていた。



➤ 9日目

学生交流活動を実施。プロジェクトも終了し, 無事発表も終えた学生全員で最後の交流会を実施した。

■ まとめ

中国及び香港の活動において, これまで教科書でしか学ぶことがなかった史跡や町並みを見学することができ, より異文化への興味と関心が高まったようである。興味を持ち始めることが, 異文化理解への第一歩であることから, 本プログラムは学生の異文化理解力向上に寄与できたと言える。

短期留学生受入れ

■ 概要

高専機構ではグローバル人材育成及び国際化教育推進の一助となるようアジア諸国を始めとして、欧米も含めた複数の国の高等教育機関と包括交流協定を締結している。さらに、熊本高専でもいくつかの高等教育機関と独自の交流協定を結んでおり、様々な形での交流を行っている。

その一環として毎年両キャンパスに複数の高等教育機関から短期留学生を受け入れている。留学生は研究室に所属して科学技術プロジェクトに取り組みながら、日本語授業や日本文化体験、工場見学、ホームステイなど様々な活動を行っている。その過程で日本人学生がチューターや活動のパートナーとして協働作業を行うことにより、日本にいながらにして国際化教育につながる経験をしている。

本稿では、国際化教育推進事業の一環としての短期留学生受入れについて報告する。

■ 受入期間、所属教育機関、国籍、人数、所属キャンパス、他

期 間	所属教育機関	学生国籍	人数	所属キャンパス	備 考
平成 28 年 3 月 12 日 ～4 月 21 日	VTC, IVE チャイワン校	香港	3 名	熊本キャンパス	平成 26 年度より継続
平成 28 年 5 月 27 日 ～8 月 3 日	オウル 応用科学大学	フィンランド	2 名	熊本キャンパス	
平成 28 年 6 月 1 日 ～7 月 29 日	カセサート大学	タイ	2 名	熊本キャンパス	
平成 28 年 6 月 1 日 ～8 月 1 日	キングモンクット 工科大学 北バンコク校	タイ	2 名	熊本キャンパス	
平成 28 年 9 月 19 日 ～平成 29 年 2 月 11 日	ニーアン・ ポリテクニク	シンガポール	2 名	熊本キャンパス	
平成 28 年 11 月 21 日 ～平成 29 年 1 月 25 日	テマセク・ ポリテクニク	シンガポール	4 名	熊本キャンパス	
平成 29 年 1 月 10 日 ～3 月 10 日	テマセク・ ポリテクニク	シンガポール	2 名	熊本キャンパス	
平成 29 年 3 月 1 日 ～平成 29 年 5 月 6 日	VTC, IVE チャイワン校	香港	3 名	熊本キャンパス	平成 29 年度へ継続
平成 29 年 3 月 4 日 ～4 月 14 日	シンガポール・ ポリテクニク	シンガポール マレーシア ベトナム	3 名	八代キャンパス	平成 29 年度へ継続
平成 28 年 3 月 5 日 ～4 月 15 日	シンガポール・ ポリテクニク	シンガポール	3 名	八代キャンパス	平成 27 年度より継続
平成 28 年 3 月 5 日 ～5 月 13 日	VTC, IVE チャイワン校	香港	5 名	熊本キャンパス 八代キャンパス	平成 27 年度より継続 *平成 28 年熊本地震 により 4 月 21 日帰国

■ 主な活動

- ・ 科学技術プロジェクト
- ・ 日本文化体験
- ・ 日本語教育
- ・ 相互異文化理解授業
- ・ 工場・文化施設見学
- ・ ホームステイ



シンガポール文化紹介プレゼン（八代）



日本文化体験（島原・かんざらし体験）



修了証授与式にて（熊本）

■ まとめ

多くの海外高等教育機関にとって短期留学生の派遣は数年にわたり継続して行われているため、熊本高専の受け入れ体制はすでに十分に理解されており、以前にも比して優秀な学生が派遣されることが増えた。特にインターンシップ的派遣の場合は、既習ではない事項を含むプロジェクトに携わるケースもあるが、学生の対応力は高く、それぞれが一定の成果を上げて帰国する。

また、これも例年のことであるが、留学生は異文化に触れ吸収することに貪欲で、かつコミュニケーションに対して高い積極性がある。所属研究室や学生寮で学習や生活の手助けをする日本人学生はそうした姿勢から刺激を得ることも多く、グローバル人材としてのありようを実感できる貴重な機会となった。また援助そのものが英語コミュニケーションのトレーニングであり、短期留学生帰国後もSNS等を利用して実践的なコミュニケーションが継続される。そうした観点から短期留学生の受け入れは得難い国際化教育推進の場となっていると考えている。

加えて今年度は香港、シンガポール、日本3か国の学生によるワークショップも開催し、単なる異文化コミュニケーションの枠を超えた同年代同士の貴重な協働の機会も持つことができた。残念ながら4月に発生した熊本地震の影響で建物や施設にも被害が及び、また留学生の安全で良好な生活環境を保つことが難しくなったことから、所属校スタッフと協議してやむなく滞在を切り上げプロジェクトを本国に持ち帰るケースがあったが、このケースを含めても、すべての留学生が無事帰国の途につくことができたことにはホスト校としての責任という観点からは満足している。

企業技術者と連携した分野横断的能力の育成と実践評価

■ 概要

本事業は、技術者として活躍するために必要な分野横断的能力の育成を念頭に、学生が高専での様々な活動で身につけた分野横断的能力について有効で信頼性の高い評価指標を構築することを目的として、平成26年度より阿南高専を中心として始まっている。熊本高専ではそれを引き継ぐ形で事業を継続しており、今年度は高専及び企業技術者との連携によりこれまで作成した指標をブラッシュアップして一般化を図ることを目指した活動を行い、今後はこれら手法と指標をパッケージ化して全国への展開を目指している。

今年度のGLセンターの発足に伴い、この事業をGLセンターリーダーシップ育成の重要な活動の一つとして位置づけ全面協力することになった。ここに、本事業の今年度までの位置づけについて報告する。

■ 事業実施の背景とねらい及び平成27年度までの活動

モデルコアカリキュラムの分野横断的能力である「汎用的技能」、「態度・志向性」、「総合的な学習経験と創造的思考力」を育成するためには、段階的な達成度評価用指標(ルーブリック)が必要である。また、高専教育における分野横断的能力を取り巻く課題は、分野横断的能力に係る教育目標の設定とカリキュラムの検討、一般科目と専門科目それぞれにおける分野横断的能力の教育目標の関連付けの検討など山積している。

そこで、平成26年からプロジェクトを開始し体育や実験実習等の科目において、チームワークや主体性といった分野横断的能力に対するルーブリックの作成を進めた。平成27年度には、分野横断的能力の育成を図ることを目標としている様々な科目において、妥当で信頼性の高い評価指標を構築していくことを視野に、平成26年度に作成した評価指標の一般化を図り、あわせて、新たな科目、教育活動における分野横断的能力の評価方法を検討した。

H28年度の事業の概要と目的・目標

・分野横断的能力育成に有効な信頼性の高い評価指標の構築

社会が求める技術者能力(分野横断的能力)の育成を図ることを目標としている高専教育の多様な活動において、妥当で信頼性の高い評価指標の構築を見据え、拠点校とサブ拠点校が連携してこれまでに作成された評価指標のブラッシュアップと一般化を図る。

・高専及び企業技術者との連携によりこれまで作成した指標のブラッシュアップと一般化

協力校での評価実験を行い、その経過を企業技術者の目による第3者的なあるいは実務的立場からのチェックを行うことで、指標や実施方法、分析方法等の問題点を整理し改善を行う。

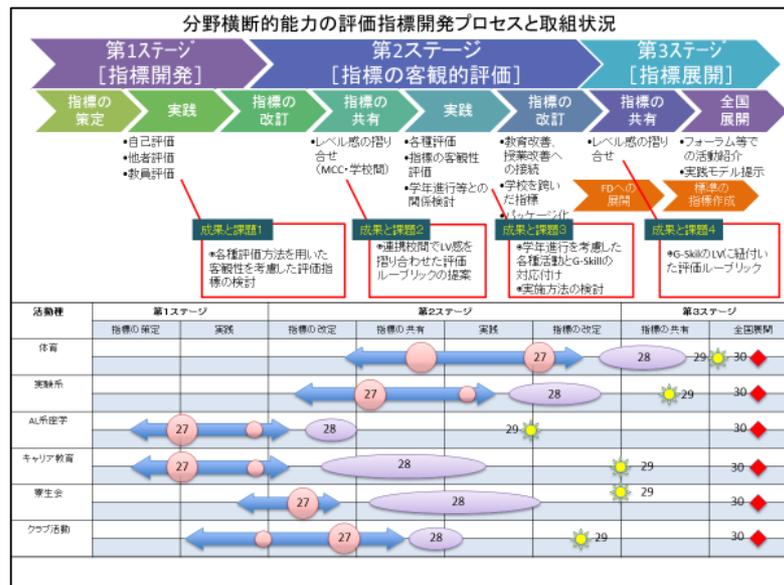
CTT+ホルダによる教育的立場からの確認も実施し、より信頼性の高い、可能なかぎり

妥当で信頼性の高い評価指標の開発を目指す。

- ・手法と指標をパッケージ化しての全国への展開

全国の高専への展開を見据え、評価指標、評価の実施方法、分析方法、集計分析システムをパッケージ化し、“簡便に活用できるもの”として構築する。

今年度は、社会が求める技術者能力(分野横断的能力)の育成を図ることを目標としている高専教育の多様な活動において、妥当で信頼性の高い評価指標の構築を見据え、まず拠点校とサブ拠点校が連携してこれまでに作成された評価指標のブラッシュアップと一般化を図った。その後、協力校での評価実験を行った。さらに、評価指標の妥当性について企業技



分野横断的能力の評価指標開発プロセスと取り組み状況

術者の目による第三者的なあるいは実務的立場からのチェックを行うことで、指標や実施方法、分析方法等の問題点を整理し改善を行った。併せて、CTT+ホルダによる教育的立場からの確認も実施し、より信頼性の高い、可能なかぎり妥当で信頼性の高い評価指標の開発を目指している。最終的には、全国の高専への展開を見据え、評価指標、評価の実施方法、分析方法、集計分析システムをパッケージ化し、“簡便に活用できるもの”として構築することを目指して事業を進めている。

事業実施高専の連携体制は以下の通りである。

- 体育：(サブ拠点校) (主) 阿南, (副) 鳥羽商船, (協力校) 苫小牧, 仙台, 石川, 北九州,
- 実験系：(サブ拠点校) (主) 鳥羽, (副) 阿南, (協力校) 旭川
- AL系座学：(サブ拠点校) (主) 米子, (副) 熊本, 鳥羽商船, 阿南, (協力校) 明石, 仙台
- 寮生会：(サブ拠点校) (主) 熊本, (副) 阿南, (協力校) 仙台, 佐世保,
- キャリア教育：(サブ拠点校) (主) 熊本, (副) 阿南, (協力校) 函館, 豊田
- クラブ活動：(サブ拠点校) (主) 熊本, (副) 阿南, (協力校) 石川, 徳山

■ 事業の具体的な成果・達成度評価

全ての活動種共通で、指標の精査、パッケージ化、サブ拠点校と協力校での評価実施、分析と指標の再検討を実施している。また、実践に必要な集計システムの開発を進めている。今年度の具体的な成果や達成状況等は下記の通りである

- ・体育：指標のブラッシュアップ及びパッケージ化済み。サブ拠点校・協力校で評価実践中。全国展開への具体的手法について検討中。集計システムの基本機能は完成し体育でトライアル実施中。
- ・実験実習，キャリア教育，寮生会：指標のブラッシュアップ及びパッケージ化済み。サブ拠点校・協力校で評価実践中。高専による活動方法の違いへの対応が課題として浮かび上がった。
- ・クラブ活動：評価指標のパッケージ化及び協力依頼が遅くなったこと，クラブ活動は前期の活動がより活発であることから，来年度当初から実践をスタートできるように準備を進める。
- ・AL系座学：指標のブラッシュアップ及びパッケージ化検討中。



平成 28 年年度第 1 回全体会議

■ 現状/今後の展望・課題

本事業を通して、分野横断的能力の評価指標を明確にし、高専間で共有することにより、高専教育の質的保障とともに多様な教育実践を促すことが可能となる。また、これまで明確な評価ができなかった高専学生の分野横断的能力の達成状況を明らかにすることができると共に、どのような取り組みによって、どのようなアプローチによって、どのような能力が高まるのかを知ることができるものと考えている。そのためには、妥当で信頼性が高くかつ使いやすい形で評価指標と教育手法，測定手法をパッケージとして提示し，高専間で広く共有，実践することが重要である。これにより，より多様な教育活動を促し，教育の質を保証すると同時に，さらなる改善を目指す創意工夫を促すことが可能となるであろう。